
END OF LEVANANT

はやぶさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

END OF LEVANANT

【Nコード】

N4368Q

【作者名】

はやぶさ

【あらすじ】

250年間続く空と地上の戦い。

空中都市レヴァナントの軍隊の3番隊隊長のアイシスは今日も終わりの見えない戦いに明け暮れていた。

そんなある日、アイシスは地上軍との戦いで砲撃を喰らい地上界へと落ちていく。

瀕死の彼を助けたのは地上界の娘クレアだった。

助けてくれたお礼にアイシスはクレアに困った時に「3回だけ」彼女を助けるという約束を交わした。

この戦いの先に待つものは・・・
空と地上が織りなす不思議な物語が始まる。

登場人物

アイシス・フォード

本作の主人公。18歳の青年でレヴァナント王国軍3番隊隊長
非常に国に対して愛国心があり国の命令とあらば何事でもやっつての
ける。

他人に対して非常に冷徹であるため友人も少ない。
剣の腕もさることながら魔法も一流。

クレア・ステン

本作のメインヒロイン。18歳

家柄はレイディアン王国の貴族の末裔であるが現在家出中。誰に対
しても優しく接し、ちょっぴり天然なところがある。ガイアとは幼
馴染で仲が良い。

ガイア・セフィール

18歳の少年でレイディアン王国の貴族の末裔であり、軍では司令
官を務めるなど名実ともにエリートである。クレアに想いを寄せて
おり、アイシスがクレアと仲良くすることを嫌っている。
敵国の隊長であるアイシスとは犬猿の仲である。

レイン・シルビア

17歳の少女でレイディアン王国の出身である。クレアとは小さい
ころから仲が良く本当の姉妹のように接している。ひょんなことか
らアイシスに想いを抱くようになる。性格はいわゆるツンデレキヤ
ラ。魔力が非常に強く、炎系の魔法なら右に出るものはいない。

ハイゼン・ハワー

レヴァナント王国最強と言われる1番隊隊長。性格は残忍ではある

が絶大な信頼がある。アクシスのことを嫌っている。

ステイール

1番隊副隊長でハイゼンの右腕的存在である。スパイ活動においてはレヴァナントでナンバー1と言われるほどである。

プロローグ

この戦いに終わりなんてない……

空中都市レヴァナント……かつてこの国では高度な文明と魔法を主体にして繁栄し栄えてきた。

空中都市と言われるのはその名の通り空高くに浮かんでいる街だからだ。

レヴァナントに住んでいる人々には普通の人間と違ってひとつだけ大きな特徴がある。

レヴァナントの人たちの背中には烙印がある。その烙印に魔力を込めることによって翼が生えるのだ。その翼で自由に空を飛ぶことができる。言うならば鳥人とでも言ったところか。その翼以外は普通の人間となんら変わりはない。

しかし、この特徴がきっかけである問題が起きてしまった。

差別だ。

250年前……まだレヴァナントの人々が地上界で生活していたころの話である。

レヴァナントの人々は人里離れた小さな集落でひっそりと穏やかに平穏な日々を過ごしていた。

ある日のことである。集落に複数人の人間がやってきた。彼らの正体は地上界で莫大な富を持つ国レイディアン王国の調査団の連中だ。彼らの目的は新しい資源の発掘の調査でやってきたのである。彼らはそこで暮らす集落の人々を見て驚いた。それはそうだ。背中から翼の生えた人間が生活しているのである。しかもその集落には珍しい鉱石がたくさんあるではないか。彼らはすぐさま国へ連絡した。レイディアン王国の重要人物や軍隊が来るのにそう時間はかからな

かった。

軍隊はレヴァナントの人々から集落を奪い取り、ドレイとして捕まっていた。捕まった人々は王国に連れていかれた。そこで待ち受けていたのは過酷な労働と差別だ。毎日ろくな食事も与えられず、その生体を研究するために人体実験を行われていたり、いやがらせを受けていた。何人も殺された。

月日だけが流れていった。ある夜、レヴァナントの人々は脱走を試みた。もちろんバレないはずがない。逃げる途中で何人が逃げ切れず死んでしまっただろうか。生きて逃げ切った者達は何日も自分たちの居場所を探し回った。そんな日々が何日か過ぎていき彼らにもようやく転機が訪れた。見つけたのである。空に浮かぶ島を。そこには地上界よりも豊かで豊富な資源があった。ここを新たな故郷にしよう、皆がそう思った。

彼らはそこにある資源をフルに活用し次々と高度な文明を築いていた。それから何年か経ち、彼らの中の一人がこう言った。

「地上界に復讐しよう」

レヴァナントの誰もが地上界を恨んでいる。

たった一人の言った言葉で戦争は始まった。

レヴァナントが勝つては負け、勝つては負け、そうこうしているうちに250年も経ってしまった。

この戦争は250年経った今でも終わる気配さえ見せない。人が人である限り争いは終わらない。

この戦いに終わりなんてない・・・

出逢い（前書き）

少しでも多くの人に面白いと言われるような話になれば幸いです。

出逢い

戦争・・・この言葉を聞いて良い印象を覚える人はあまりいないだろう。

自国が勝利すれば多大なる利益を得ることができ、敗退すれば多大なる被害を被ることになる。

たとえ勝利したとしても勝利するまでの過程で多くの犠牲が出る。だがそんな戦争を生きがいとしている者もここに少なからずいたのである。

爆発音が鳴った。爆発音はひとつだけではない。次々と爆発音が鳴り響く。そう今まさにこの瞬間戦いは起きている。レイディアン王国軍の飛空艇がレヴァナント王国の艦隊めがけて砲撃している最中だ。戦況はレヴァナント王国が劣勢だ。次々とレヴァナント王国の艦隊が破壊されていく。

「隊長！アイシス隊長！このままでは3番隊艦隊は我々を含め全滅です！！」と3番隊本艦で一人の乗組員が男に訴えている。

「ああ」男はあっさりと返した。

「ああってこのままでは我々だって全滅なんですよ！？ここはいつたん退却して出直したほうがよろしいかと・・・」

「俺が直接相手してくる。」

「えっ！？」

「おまえらは先に退却してる」そう言い捨て男は立ち上がり艦隊の外へ出て行った。しかしそのはき捨てた言葉にはどこか自信があるように聞こえた。

その男の名前はアイシス、レヴァナント王国軍3番隊隊長である。軍の隊長とだけあってかなりの実力を持っている。彼はこの戦争で数々の功績を挙げている。わずか18歳で隊長に就任したというエ

リートだった。

アイシスは甲板に立っていた。レイディアン王国軍を殲滅せんと。金色の髪を風になびかせながらそっと剣を抜く。そしてレヴァナント王国の人だけがもつ特殊な能力・・・背中の烙印に魔力を込める。次の瞬間白い翼が烙印から生えた。陽の光を浴びながら純白に輝く翼はまさに天使の羽根のようだ。

白い翼を羽ばたかせアイシスはレイディアン王国軍の飛空艇に閃光の如く突撃していく。そしてアイシスは飛空艇に斬りかかった。すると飛空艇は真っ二つに両断された。2隻3隻4隻と飛空艇は両断されていく。そうアイシスは己の剣戟だけで飛空艇を両断するといふ人間離れした強さを持っていた。順調に飛空艇を撃破していく中、敵の1隻の飛空艇がアイシスめがけて砲撃した。アイシスがその砲撃に気付いた時には既に遅かった。気付いた時には既に彼に砲撃が直撃したのだ。

「うわあああああああああああああ」

砲撃が直撃したアイシスは空から地上へと堕ちて行った。

あれからどのくらい経ったのだろうか？

アイシスが目を覚ますとそこは見慣れない部屋だった。

「ここは・・・ぐっ！！」体中を激痛が電流のように走った。自分の体を見渡すと包帯だらけだった。

「誰かが手当てしてくれたのか。ってことは誰かが俺を回収してレヴァナントに連れて帰ってきたんだな。にしてもここは一体・・・」
「あつ！目を覚ましたんだ！良かった〜！！」と声がする方を見た。そこには自分と同じくらいの歳の少女が満面の笑みを浮かべながら経っていた。

「おまえが俺を手当てしてくれたのか？」

「そーだよ!」

「俺は一体どのくらい眠っていたんだ?」

「2週間だよ!」

「2週間だとっ!?!?そんなに長いこと眠っていたのか・・・じゃあ早く軍にもどらなくは・・・ぐっ」

「そんな体じゃあまともに歩けないよ。完璧に治るまで安静にしないでなくちゃ!」

「チツ・・・くそっ、とここでここはどこだ?レヴァナントのどこかの施設か?」

「レヴァナント?違うよ、ここはレイディアン王国の街のはずれにある小さな家だよ!」

「レイディアン王国だと!?!?っていうことはおまえは地上人だな!」

「ん?そうだけど・・・それがどうかした?」

「どうかしただと?ふざけるなっ!?!?てめえ一体何を考えてる!?なぜ俺を手当てした!?!?」

「きみ空から落ちてきたの。」

「なっ」

「すごい怪我してたから手当てした、うん。」

「俺が聞いているのはそういうことじゃない!なぜレイディアン王国の敵である俺を助けた?俺を捕虜として色々尋問するためか!?!?」

「人を助けるのにいちいち理由なんている?あたしはただあなたを助けたかったから助けた。それ以上に理由なんて必要かなあ?」

「・・・おま」

「さっきからおまえおまえって、あたしにはクレアって名前があるの!」

「あたしの名前はクレア!いい覚えた?ク・レ・ア!」

それがアイシスとクレアの出逢いであった・・・

3つだけの約束

「あたしの名前はクレアだよ！君の名前は？」そう少女は言った。

「知るか！！」

「はあ〜君さあ友達少ないでしょ？」

「う、うるさい！！だまれ！！」どうやら凶星のようだ。

「あたしが友達になってあげようか？うん今日から友達だ！で、名前は？」

「勝手に決めるな！チツ・・・な、名前はアイシス。レヴァナント王国軍3番隊隊長だ。」

「へえ〜アイシスは隊長なんだ！すごいね〜！！」

「おまえ勘違いするなよ？」

「おまえじゃない！クレ・・・」反論してくるクレアを無視してアイシスは話を続けた。

「先に言っとくが俺は怪我が治ったらすぐに軍に戻ってまた戦う。」
「つまり？」

「俺から言わせればおまえだって敵の一人だ。命の恩人だろうが関係ない。俺は国のためなら命の恩人だろうが殺す。」

「・・・・・・・・」
「助けたことを後悔するんだな。俺の怪我を治したのはミスだったな。」

「後悔なんてしてないよ。当たり前のことをして後悔なんかするわけない。むしろ当たり前のことをしない方が後悔する。」

「気に入くわねえ野郎だ。俺の怪我が治ったら一番最初にてめえを殺す。」

「君にはできないよ。だって君、本当はすごく苦しんでる。本当はすごく辛いんだよね？」そう言い残してクレアは台所の方に行ってしまった。

「俺が苦しんでる？笑わせるな。」『あの女いまいちよくわかんね

え。馬鹿な女・・・』そう思いながらアイシスは眠りつく。

1ヶ月後・・・

アイシスは日の出が出る少し前に目覚めた。怪我ほぼ完治している。あれだけの重傷を負いながら1カ月半でほぼ完治するという現実ではありえない回復をみせた。

「よし。怪我はほぼ治った。あとは帰るだけだな。」アイシスは重たい腰を上げ、服を着替え、剣を持ち、家を出ようとしたその時、
「勝手にどこに行くの？」クレアの声がした。

「なんだ起きてたのか？ずいぶんとお早い目覚めだな。」

「そりゃあね！だって君の寝顔かわいいんだもん！」

「なっ・・・」顔が熱くなるのが自分でもわかった。

「あゝ照れてるゝかわいい！」

「てめえはどれだけ俺を馬鹿にすれば気が済むんだ！？」アイシスは声を荒げて言った。

「あたしを殺さないで出て行くの？」

「・・・一応感謝してる。今は気が変わったんだ。だから今回だけは見逃してやる。」

「おおゝ意外と優しい心をお持ちのようですねゝ安心安心！」

「だから勘違いするな。今回は見逃してやるが次会った時は殺すからな。」そう言いアイシスが家を出ようとしたその時、

「じゃあまたね！」そう言うクレアの顔は笑顔だった。その言葉がアイシスの心に深く突き刺さった。自分が殺すと宣言したにも関わらずクレアは敵味方関係なくただ純粋に友達に接するように言ったのである。自分は戦いのことばかり気にしているのにクレアは友達として接してきたのだ。だからその一言がすごく心に突き刺さったように感じた。アイシスの足がピクリと止まる。

「・・・そう言えば助けてもらったお返しをしてなかったな。これをやる。」そう言ってアイシスはひもの先にクリスタルのついた首

飾りを手渡した。

「わぁ綺麗！これくれるの!？」

「ああやる。借りができたまま殺すのも気が引けるからな。これでおあいこだな。」

「おあいこって首飾りと命って見合っていない気が・・・」

「なっ・・・この首飾りの先についているクリスタルはとても高価な物なんだぞ！」

「ふ〜ん」

「ち、ちなみに恩返しはこれだけじゃないぞ！実は同じのをもう一個もってる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！そうか！そうだったんだね！そういうことか〜！」

「何がそういうことなんだ？」

「ようはあれでしょ！ペア首飾りのなものでしょ！意外とやるねー」

「違う違う違う、ちがー！ー！ー！ー！！！」

「そんなに否定しなくても・・・」

「この首飾りのクリスタルはちょっとした代物でな、いいか見てるよ！」アイシスはそのクリスタルに魔力を込める。するとアイシスのクリスタルが光始めた。するとアイシスのクリスタルが光始めたのと同時にクレアの持っていたクリスタルも光始め、二つのクリスタルが共鳴し始めた。

「わかったか？このクリスタルに魔力を込めるとお互いのクリスタルが共鳴し合うんだ。もともとこのクリスタルは連絡用として用いられてきたんだ。おまえがクリスタルに魔力を込めても共鳴する。」

「へえ〜でもなんでこんなの渡したの？共鳴し合うだけで別に電話みたいに話せるわけでもないでしょ？」

「3回だけ助けてやる。」

「へ？」

「どごそのランプの魔人ではないが3回だけおまえが困ってたら助

けてやるって言うてんだ。俺のできる範囲で願いを3回叶えてやる。だからおまえが困っていて助けがほしいときにこのクリスタルに魔力を込めて俺を呼べ。3回だけなら助けてやる。」

「わぁありがとう！じゃぁ困ったことがあったら呼ぶね！」

「じゃぁ今度こそ俺は帰るからな。」アイシスは背中中の烙印に魔力を込めて純白の翼を生やした。そして大空へと飛び立ちクレアの家を後にした。

クレアというたったひとりの少女とかけがえのない約束を交わして・
・

「わぁホントの天使みたい！またねアーちゃん！」

ひとつめの願い

「ようやく帰ってきたな」

俺は1ヶ月半ぶりにレヴァナントに帰ってきた。思えば1ヶ月半前、敵の爆撃を受けて地上界に落ちて変な女に助けってもらって、拳句の果て変な約束しちゃうわ大変だったな。

「おっと総大将に帰還したことを伝えに行かなきゃな。」1ヶ月半も帰らなかった理由をなんて話せばいいんだか・・・重い足取りでアイシスは総大将のもとへ向かうのであった。

「なんだ死んでなかったのか、残念。」

「なんだハイゼンお前こそ死んでなかったのか、残念。」この憎まれ口を叩くゲス野郎は我がレヴァナント王国軍で最強と謳われし1番隊長のハイゼンだ。ちなみ俺は最強だとはまったく思っていない。俺のことがよっぽど嫌いらしく殺されかけたこともある。ちなみに俺もこいつのことは大嫌いなのは言うまでもない。

「いやああれしきの攻撃でやられるとは3番隊も落ちたもんだね。隊長が雑魚だから仕方ないか。」

時間の無駄だから相手にしないで行くことにする。

「ちよっシカトこいてんじゃねえぞ!!」とハイゼンは叫ぶのであった。

「と叫ぶのであった。でおわらせるんじゃねえー!!!!」

そのころ地上界でクレアは・・・

「・・・うんわかった！・・・うん。・・・うん！了解！じゃあまたあとでね！」電話がかかってきた。電話の相手はあたしの友人からだった。要件は隣街までお遣いに行つてほしいとのことだった。自分で行けばいいんじゃない？とは思つたけど・・・

「いいとは言つたものの・・・レイディアン森林を抜けなきゃいけないし・・・」レイディアン森林はとても広い森だ。一度迷つてしまつたら抜け出せない。しかも森には魔物が生息するというサイテーな森林である。

「うん、困つたなあ・・・あつそうだ！これを使えばいいんだー！」あたしが思い出したのはアイシスがあたしとした約束だった。

「困つたら呼べつて言つてたよね！このクリスタルに魔力を込めればいいんだっけな？」あたしはアイシスが言つた通りにクリスタルに魔力を込めてみた。

「はあなんとかうまいこといい訳できたな。帰つて寝よ。」とその時だった。クリスタルが光始めた。

「ん？クリスタルが光つてる。クレアとかいつたっけな？あいつなんか困つてんのか？」たく本当にめんどくさい約束をしたもんだ。あほらしくて笑いがでた。しかし約束を守る性分なのでクレアのことへ行くことにした。

「お前どこ行くんだ？」ハイゼンが訪ねてきた。

「ちょっと地上界まで行つてくるだけだよ。」クレアとの約束のために行くなんて口が裂けても言えるわけない。

「何しにいくんだ？戦争は一時休戦だ。なぜ地上に行く必要がある？」

「お前には関係ないだろ？」嫌いな奴とは関わらないほうがいいだろう。ハイゼンを無視して俺は地上へと向かつた。

地上に向かったアイシスをハイゼンは黙って見送った。

「ステイル来い。」ハイゼンは言う。

「はい。隊長参りました。」ステイルはやってきた。ステイルとは1番隊の副隊長でハイゼンの右腕的人物である。

「ステイル、アイシスを監視しに行つて来い。」

「アイシス隊長がどうかしたんですか？」

「あいつ何か隠している。場合によっては斬らなければならぬからな。まあ俺としてはその方がいいがな。」冷たく言い放った。

「わかりました。うまいこと探つてきます。それとひとつ確認したいことがあるのですが・・・」

「なんだ？」

「隊長はなぜアイシス隊長とあれほどまでに仲が悪いんでしょうか？」

「そんなに気になるのか？」

「はい」

「あいつはな・・・あいつはな!!あいつは昔・・・俺が当時やっていたRPGゲームのラストシーンをばらしやがったんだ!!」

「・・・それだけ？」

「それだけだ?!?何を馬鹿なことを言っている!!そのゲームはとつても人気で朝から長蛇の列に並んで10時間かけてやっと買えたゲームなんだぞ!!」

「・・・」

「それなのにあいつは知り合いがそのゲーム会社の人で発売の1週間前に手に入れてたんだぞ!!一週間前とかチートだぞ!!ふざけんなってんだああああああ!!!!それで俺の怒りは爆発し奴を殺しにかかった!!その時は殺し損ねた・・・その日以来、俺はあいつが大嫌いになった。」

「・・・」

「・・・どうした？」

「・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アイシスは地上界へと降り立った。

「クレアの家はこの辺だったけな。おつとあれか。」なんだか女の子の家に行ってノックをするのは変に緊張するもんだな。ノックしてみた。ドアが開く。

「あつ！本当に来てくれたんだ！？なんか嬉しい！！」

「んで、さつそくだが要件は何だ？」

「お願いはね・・・えへへ」なんだ気持ち悪い奴だな。

「実は、お遣いに付き合っしてほしいの！」

「なんだお遣いか！まかせろ！・・・・・・・・えっお遣いつ！？！

?!?」

「うん！！」

思えば俺の人生の歯車はこのあたりでおかしくなってしまったんだろっつな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4368q/>

END OF LEVANANT

2011年10月8日17時02分発行